

成願寺

季報
103

平成26年12月18日
(2014年)

目次

「お盆のころ」―撰衆生戒への目覚め―山口正章	1
山内短信	1
ハイレッドビッドソンジャパン株式会社坐禪会報告	7
小笹会報告「十年間の留學生生活、そしてアジアへの思い」李鍾元	9
公算・成願寺縁起を毛筆で書いて長く後世に残しましょう	12

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

平成二十六年 孟蘭盆会説教

お盆のころ ―撰衆生戒への目覚め―

福井県龍泉寺住職 山口正章

みなさま、こんにちは。先日は台風八号が来て随分と心配されたことと思います。特に九州地方では甚大な被害が出て、その様子が何度もテレビに映し出されておりましたね。

関東地方は大きな被害もなく、台風一過で暑い日



福井県龍泉寺住職
山口正章老師

山内短信

◎除夜の鐘・新年祈禱会（百七組予約受付・一撞き千円）

大晦日夜十一時半来会者一同で読経―撞き出し

平成二十七年元旦零時半新年祈禱―年賀祝杯

＊除夜の鐘の前にお焚きあげをします。本年中の護符などをお持ち下さい。＊乾杯の干支杯はお持ち帰り下さい。＊干支にちなんだ絵馬をおわけします。絵馬に描かれる干支の絵は滋賀県東門寺住職藤木道明老師によるものです。

◎大般若祈禱会のお知らせ

平成二十七年一月十一日（日）、午後一時より

大般若祈禱会を開き、家内安全・身体健全・商売繁盛等を祈念します。どなたでも（檀家以外も）受け付けます。願文を添えてお申し込みください。

◎年始めの会（初観音）のお知らせ

平成二十七年一月十八日（日）午後二時より、新年初の観音さまの縁日大祭（祈禱会）を行ないます。願文を添えてお申し込みください。ご祈禱後はお汁粉で懇親会です。会費 千五百円

が戻りましたが、被災された方々に心からお見舞いを申し上げたいと存じます。

いま日本中で自然災害が次々と起こり、被災されて困っている方がたくさんいらっしゃいます。そういう地域や被災された方々に対してボランティア活動や募金をする。または、直接に支援できない場合でも被災された方を思い、気持ちだけでも寄り添うことが大切です。一番良くないのは無関心になることです。

さて、先ほど方丈様からご紹介をいただきましたが、本日は十年振りに成願寺様のお盆法要に参上しました。「もう十年も経ったかな」と思いますが、その頃は住職地の福井県龍泉寺から参りました。現在は横浜市鶴見の大本山總持寺に二度目の奉職をしております。

總持寺では、来年の平成二十七年に二祖峨山韶碩がさんじょうむき禪師様の六百五十回大遠忌だいおんきという大きな行事を迎え、既にその準備や法要が始まっております。

他の宗派に於いては二代様の大遠忌は一般に行なわれないようですが、私ども曹洞宗では總持寺も永平寺も二代様の大遠忌を開祖様と同じように五十年ごとに勤めております。

なぜ二代様の大遠忌を行なうのかと申しますと、どんなに立派な方が素晴らしい教えを説かれても、その教えを引き継ぎ広めていく人が続かなければなりません。茶道や剣道など、道のつくお稽古事やまたは職人の世界などでもそうでしょう。いくら立派な教えや振る舞い、技があってもそれを引き継ぐ人がいなければそこで終わってしまいます。そういう意味もあつて二代様を顕彰するのですが、実は二代様は代表でありまして、脈々と続く三代様、四代様、五代様…、今に至るまでの禪師様方を顕彰し報恩感謝申し上げるということなのです。

曹洞宗では教えを受け継いでいくことを重要視し、これを「相承そうじょう」と申します。まさに總持寺の大遠忌テーマは「相承」です。相い受け継ぐ、ともに受け継ぐといった意味でございまして、總持寺を開かれた瑩けい山ざん禪師様の御教えを峨山禪師様が受け継がれ、現在に至る基を築かれました。そして多くの弟子や歴代のお坊様方が、御教えをコップの水を次のコップに一滴も残さずに移すかのごとく代々伝えてこられました。ですから私たちも、後世に同じように伝えて行かなければならない責任があるのです。

そうしたことに今一度気付く御縁がこの大遠忌で

す。しかも五十年に一度ですから、私たちにとって一生に一度か二度しか巡ってこない勝縁です。来年は成願寺様の檀信徒の皆様もぜひ總持寺にご参拝いただき、峨山禪師様のお徳に触れていただきますようお願い申し上げます。

總持寺の修行僧

鶴見の總持寺には色々な顔がございます。まずは曹洞宗の大本山としての顔。そして修行道場としての顔。現在は百七十名近くの修行僧がおります。それから石原裕次郎さんで有名ですが、数千軒のお檀家様を擁する檀家寺でもあります。また企業や団体の参拝・坐禅研修会なども行なわれます。さらに横浜という土地柄、外国人も大勢訪れます。

總持寺には毎年新しい修行僧が六七十人ほど上山してきます。そのほとんどが学校を卒業してくるお寺の子息が多いのですが、そうでない人もおります。そうでない修行僧を大別すると、三つのパターンに分かれます。

一つは仕事を定年で終え、思うところあつて修行に来る者。もう一つは最近の傾向ですが、東日本大震災の影響を受けた者が修行にやってきました。震災

後に仕事や学校を休んで被災地でボランティア活動が続け、長く続けるうちにいろんな方と出逢い、いろんな事を思つて、自分はお坊さんになりたいなど、そう決心して修行にやつてくる人も多いわけです。

三つ目は、結婚を機に僧侶となった人です。つまり、結婚を前提にお付き合いしている彼女の実家がお寺であつたということです。「娘と結婚するならお坊さんになつて寺を継いでください」と彼女の親に言われ、それまで仏教とは縁の薄かつた彼は一大決心を迫られるわけです。彼女を選んでお坊さんになるかどうかを。出家する動機として、彼女と一緒にいるためだなんてけしからん、と思われるかもしれませんが、そういう御縁も宜しいとお釈迦様はおっしゃっております。ということは、彼にとつて彼女は自分を仏道に導いてくれた菩薩様といえるわけです。彼女と出会えたからこそ、仏道に出会い修行に入ることができなのです。

さて、一昨年總持寺に入門した修行僧の中に、ある理由で来た方がおりました。彼は青森県の出身で六十歳を超えていました。お寺の出身ではなく在家で育ち、歯科技工士をされていました。専門学校に学び、そこで将来の伴侶となる女性と出会いました。

卒業後はともに同じ齒科医院に勤め、結婚して可愛い女の子を授かりました。共働きを続けながらお嬢さんを育て、幸せな家庭を築いていました。ところがお嬢さんが一歳半になったある晩、突然高い熱を出して、あつという間に亡くなってしまうました。悲しみの中にお葬式を出し、菩提寺の方丈様に頼んで供養をいたしました。

先程の話ではございませんが、まだ若かった彼は仏教にはあまり関心がありませんでした。その彼が愛娘の死をきっかけにお墓に詣り、菩提寺の法要に参列し、お説教を聞き、自らもお経を読むようになった。そういう生活を何年か続けているうちに、彼の心のなかに「お坊さんになつて娘の菩提を弔いたい、供養したい」という気持ちが少しずつ芽生えてきたのです。しかしその時には新たに二人の子どもさんを授かっていました。長女を突然失いましたが、その後二人の子宝に恵まれたのです。小さな子どもを二人抱え、今自分が仕事を辞めてお坊さんになったら家族の生活が立ち行かなくなります。ですから出家することを当時はできませんでしたが、長女の菩提を自ら弔いたいという気持ちは色あせることなく、ずっと心の奥に秘めていたのです。

やがて長女の死から二十年近くが経ち、その間も齒科医院で働いて二人のお子さんを立派に育て上げました。そして、下の子が大学を卒業して社会に出る時に、初めて自分の思いを家族に打ち明けました。家族の反応は、あきれかえっていたそうです。奥様曰く、「お父さんは六十歳を過ぎ身体にあちこち病を抱えているのよ。糖尿病もあるし血圧も高い、そんなお父さんが厳しい禅の修行道場に入つてどうしてやつていけるのですか」と。

奥さんのご心配は至極当然なことでした。總持寺の朝はとても早いです。まだ外が暗いうちから坐禅や朝のお勤めがあり、長い廊下の雑巾がけ掃除があります。食事はいわゆる精進料理で、動物性タンパク質のものはありません。そして自分の息子のような年頃の先輩僧から指導を受けます。個室ではなく共同生活であつて自分の自由になる時間もほとんどないという厳しさです。「とてもお父さんが行けるところではないですよ」とあきれる家族に対し、切々と、お坊さんになつて長女の供養がしたい、という積年の思いを訴えました。そしてやつと理解をもらい、菩提寺の方丈様にお願ひして頭を剃り、衣をまとつて出家の身となつたのです。

そして、一昨年の春に大学を卒業したばかりの若い修行僧に交じって總持寺の門を敲いたのでした。入門を許されて一歩お寺の中に入りますと、それまで社会で得た地位や名譽は一切通用しません。また年配の修行僧にとっては、息子のような若い先輩僧から指導を受けることが多く、なかなか難しい部分があります。

また、家族が心配されたように何度か体調を崩すこともありました。しかし、そのような生活も一年余りが過ぎると總持寺の修行に慣れて元氣になりました。

その彼が、次のようなことを私に話してくれました。「山口老師、私は以前から申しておりますように、亡くなった娘の菩提を弔うためにお坊さんになろうと思ひご本山に上がりました。父親として今まで下の子たちを養育してきましたが、これからの人生は亡くなった長女の供養に尽くしたいとの一念でした。でも、此処で修行生活を送っているうちに、思いが少しずつ変わってきました」と。

修行生活を過ごすうちに、彼自身の気持ちが変わってきたと言うのです。どういふことなのかと尋ねますと、彼の返答は次のようなものでした。

總持寺では朝四時に起きてから夜九時に寝るまでの全てが修行です。決められた通りの修行生活を三百六十五日ほとんど変わることなく繰り返し繰り返し行ないます。修行は繰り返し行なうから尊いのであり、一度や二度するのは研修や稽古といいます。修行道場では一年、二年、中には十年と修行を続ける方もおりますが、その時間と修行の過程の中で自分自身が成長し変わっていくことを実感できるといいます。

また、總持寺には色々な人がやってきます。お檀家さんがありますから、お葬式や法事があります。僧侶の話を聞くのは初めてという人も多くいます。会社・企業の坐禅研修会も開催されます。深い悩みを抱えていて毎月の坐禅会に参加される方もおります。全国からの参拝者も大勢来られ、宿泊する場合には寝具の手配や食事の準備などのお世話もあります。外国の方の参禅会もよく行なわれます。このように様々な方々が、様々な思いを抱いて總持寺においでになり、私たち修行僧と接する機会があるのであります。反対に、私たち修行僧にとっても總持寺で様々な方と出会いいろいろな経験をすることになるのです。私にとってそういう経験をやる中で「ただ娘の

菩提を弔うだけではなく、僧侶として自分ができる範囲で何か世の中の役にたち、人々が喜ぶようなことをやりたい」と感じるように変化してきたのです。彼のこの言葉を聞き、私は大変感動しました。

人々にとって、世の中にとって役に立つこと

皆さんもご存じの『修証義』というお経がございます。これは道元禪師が告示になられた『正法眼蔵』から特に大切なお言葉を抜き出し、明治時代にまとめられたものです。第一章から第五章までございますが、第三章「受戒入位」には「十六条の戒法」が説かれています。私たちはこの十六条の戒法を授けていただいて、正式な仏教徒となるわけです。

皆さん、戒とか戒法と言いますと「いましめ」と解釈し、これをやってはいけない、あれをやつてはいけないと窮屈なものに思う方が多いわけですが、本来は私たちに元々そなわっているものに目覚めることを指します。本来そなわっているものとは「仏性」です。それに自分で気がついて目覚めなさいということなんです。曹洞宗では戒法を十六通りに整えていてこれを十六条戒と称し、修証義第三章に示されております。

まず最初が「三歸戒」と申しまして、「歸依仏」「歸依法」「歸依僧」です。仏に歸依し、教え（法）に歸依し、そして僧（僧侶のみならず仏教徒全体）に歸依します。その三つの戒法を先ず敬いなさいということです。その次が「三聚淨戒」と申しまして、一つ目が「攝律儀戒」悪いことはしない、二つ目が「攝善法戒」善いことをしましょう、です。当たり前のことじゃないかと思われるでしょうが、善惡の区別はどこでしますか。世界各地で現在も戦争や紛争が起こっています。みんな自分が正しい、聖戦と言っています。しかし正しい戦争なんてこの世にあるのでしょうか。価値観や時代、立場が違えば、物事の善し惡しの判断が違ってきます。何に照らしていくのか。そのところを考えなければなりません。

この「三聚淨戒」の三つ目が「攝衆生戒」といいます。善いことを行ない悪いことをしないことが、自分だけに留まらず人びとや社会にとって役に立つようなものにいたしましょう、という教えです。

話を戻しますと、彼は修行生活が続けるうちに三つ目の「攝衆生戒」に自ら気がついて目覚めたことになるのです。經典に説かれているからわかった、

誰かに教えてもらったからわかったということではない。そのことに私は感動したのです。

彼は二年間の修行予定で来ましたので、今年の春に故郷へ帰りました。總持寺で修行している間に、女の子の初孫が生まれていました。彼が帰る頃には一歳半になり、ちょうど幼くして亡くなった長女と同じ年頃になっていたのです。

実は「摂衆生戒」はそのまま「お盆のころ」に繋がります。これからお盆の法要が修されますが、自分のご先祖様だけではなく、ありとあらゆる魂、動物や虫などにいたる全ての魂に対して供養の心を向ける。これが大切なことなのです。更にお盆で大切なことは、ご先祖様が現在の私をご覧になったとき、私が恥ずかしくない生活をしているか。もしお見せできないような生活であるならば、これを正しい道に戻すきっかけとしていただきたい。それがお盆であり、お寺詣りをするということであり、ご先祖様にとつての何よりの供養になるのではないかと思うわけです。是非この機会に「摂衆生戒」の教えを学んでいただきたいと存じます。

エピソードを御紹介しました彼も、元気に故郷で「摂衆生戒」を実践していることでしょう。 合掌

ハーレーダビッドソンジャパン株式会社坐禅研修会の報告

去る十二月三日（水）、アメリカに本部を置くバイク製造会社ハーレーダビッドソンジャパン株式会社のテクニカルサポート&オペレーションズ部社員による坐禅研修会が修行され、静岡県良泉寺住職の大塚達雄老師が指導をされました。年に数回部内でいろいろな体験をされ、勉強と親睦を図っているということで、今回は希望の多かった坐禅を修行しに来山されました。感想が届きましたので紹介いたします。

＊「日本人としてこうあるべき」という作法やきまり、立ち振る舞い等、最近を意識しなければ触れることの少ない教えをいただく機会が持てたことは、日本人として嬉しく思いました。

＊坐禅中、怪我をしている膝が痛み出しましたが、途中で膝を立てると周りの人の集中を切らしたり「警戒で叩かれるかも」との思いから、痛みのある膝に意識が集中してしまったので、次の機会には怪我がある場所は守ってから始めることとしました。

＊「お経を読む」という今まで行なったことのない体験は、坐禅と同じほど新鮮で、心の落ち着く体験でした。



美しい合掌の指導



本堂での坐禅



書院での行茶

*坐禅をすることも日本文化なのだと、改めて思いました。

*当社のようなインターナショナル企業に勤めていれば、他の国籍の方と接することも多く、事によってはコミュニケーションの際に自分の国の事をきちんと知っていないと礼を失すると思いますので、正座の仕方など作法のお話はためになると思いました。

*初めての坐禅は、とても興味深く飽きることなくあつという間に時間がたつてしまいました。

*もともと私が法事の席で聞く説話が好きだという事もありますが、身近な話題や基本的な（でも知りませんでした）マナーについて等、普段の自分の生活に重ねてイメージすることができ、惹きつけられる話ばかりでした。また先生の所作と言葉の美しさ

は勉強になりました。

*坐禅をしている間は、うまく自己の世界に入ることができずに、キョロキョロしてしまいました。が、遠くの鳥の声と車の音を心地よく聞いていました。

*寒かったですが、ピーンと張った空気と静寂がとても気持ちよく、スッキリしました。

*元々、仏教（禅宗）には興味があつたのですが、初歩的な事からよく分かつていないので、まずは基本的な考え方・教え等から解説して頂ける講座等があれば、是非参加してみたいです。

*いつもの感覚で参加しましたので、予想以上にきつかったです。でも、貴重な体験ができました。日本のよき文化を再認識できました。

*時間の制約で、しかたがないのですが、もう少し長く坐禅を組んで集中したいとも思いました。

*こちらから質問が出来る時間が少しあるとさらにおもしろいなと思いました。

*日本の基本的な作法を教えて頂いたのが、とてもよかったです。

*日本人ならだれでもしたことがある所作の正しい形が理解できました。

*合掌やお辞儀、お焼香などの正しいお作法の習得が出来ました。

*禅宗のならわしなど初めて聞くお話が多くて勉強になりました。

*坐禅は胡坐をかいて坐るという事ではなくもつと奥深い事だと学ばせて頂きました。

小笹会学生研究報告

十年間の留学生活、そしてアジアへの思い

東京大学大学院 李 鍾元

私が日本で留学を始めてもう十年が経ちました。二〇〇四年、早稲田大学国際教養学部に入學した当時には、私が交換留学でアメリカに行ったり、東京大学とシンガポール国立大学に進学したり、そして来年からはまた東京へ戻り、社会人として働くことになると思いますもありませんでした。私が常に新しい環境でチャレンジすることができたのは、数々の幸運、そしてたくさんの方々のご支援があったからこそだと思います。そしてついには、自分の人生をかけて達成したい目標を見つけることができました。

韓国で高校を卒業する前まで一度も海外に出たこと

のなかった私が、大学を卒業する頃には自分のことをアジア人として認識し始めたのは不思議なことでありました。しかし、大学時代を送りながら出会った留学生たちとの交流、またアメリカでの交換留学生生活を通じて自分の元となるアジア地域に愛着を持てるようになり、アジアがより強くなってほしいという漠然な夢を見るようになりました。限らない潜在力を持つアジアが、高いレベルの経済協力を通じてより強い影響力を発揮できるように貢献することが、私が初めて設定した目標であります。

しかし、余りにも漠然な夢であったため、私は何をどうしたら良いのが全くわかりませんでした。自分の夢をより具体的な目標に変える必要を感じた私は、大学を卒業した後、東京大学公共政策大学院への進学を決めました。グローバル化の潮流の中で、アジア地域がやるべきこと、そして自分に出ることを見つけるのが大学院に入學した私の最初の課題でありました。二年間東京大学で国際政治や経済政策を研究する中、私は二つのことに気づきました。

まず、アジア地域がヨーロッパのEUのような地域共同体を創れないのは「当たり前」だということであ

ります。アジアには数多くの人種・言語・文化が存在するほか、アジア諸国の経済発展レベルには相当なギャップがあります。例えば、日本では再生エネルギーの普及が課題となっていることに対し、東南アジアではまだ沢山の人々が電気のない生活を送っています。このように直面課題の異なるアジアの国々が同じテーブルに座り、アジアの未来についていくら議論しても、現実的な結論を生み出すことは難しいだろうと私は考えました。

従って、アジアにとつては「地域内に存在する経済発展レベルの格差を縮小させること」が先決であり、地域内でのインフラ投資・開発の活発化がこの問題へのソリューションに成り得ると私は思いました。既に産業化を成し遂げた日本・韓国・シンガポール・台湾の資本や技術は、アジア開発途上国にとって成長への踏み台となり、また途上国の経済成長および所得増大はアジア先進国にとつては新たな成長のチャンスとなり得ると考えました。

東京大学でも途上国に関する事例研究はできましたし、東南アジアからの留学生も数多くいました。私はより東南アジア地域にフォーカスを当てたかったため、もう一度シンガポール国立大学のリークアンユー

公共政策大学院への留学を決めました。シンガポールではデベロップメントスタディを専攻とし、インフラ・不動産・都市行政を含む都市計画政策の側面から東南アジア、そしてアジア地域について研究し続けた上、在学生の半数を占める中国人及びインド人の学生たちとの交流にも積極的に取り組んだことで、私のアジアへの理解を更に深めることができました。

一年間シンガポールで留学生活を送りながら一つ驚いたことがあります。シンガポールに所在する大学でシンガポールのイシューが中心となるのは当然のことだと受け止めていたのですが、教科課程において日本の政治や外交が話題となるときはあっても、日本の経済や成長モデルが学生たちの興味を引き出すことは滅多にありませんでした。恐らくは、日本社会が一九六〇年代から既に発展を遂げ、もう成熟段階に入っているからだと思われました。現在の途上国たちにとつて日本の社会や経済はまだ遠い未来の話に過ぎず、ベンチマークの対象としては成り立たないという認識がありました。

この問題に気付いていた日本人の学生たちは「ジャパントリップ」というプログラムを立ち上げ、毎年二十人の学生たちを日本に連れていくようにしていま

した。今年の二月にはアベノミクスをテーマとした第四回目のトリップがあり、日本の成長戦略・復興政策・外交政策などをきちんと理解してもらえる機会となりました。私も企画側として参加し、シンガポールから二十人の学生たちを連れて福島県・宮城県・東京都・京都府に訪問しました。一週間の間に南相馬市長、霞ヶ関の官僚たち、そして石破幹事長を含む自民党の議員たちとミーティングするなど、日本人の学生たちにもなかなかできない貴重な経験をすることができました。

このトリップがきっかけでシンガポールからきた海外留学生たちがより日本に興味を持つようになり、彼らの日本への認識が変わっていくことを見ながら、私はお互いにコミュニケーションをとり、理解を深めることの大切さを改めて実感しました。また、アジア地域の二つの軸となる東アジアと東南アジア両方を経験した私にできること、そして果たすべき役割は必ずあると確信しました。

来年の四月からは東京で社会人としての初めの一歩を踏み出します。自分の中で目的地ははっきりしていても、そこまで至る道は数え切れないほど多く存在するため、大学院修了後の進路について思い悩んだと

きもありました。しかし、私が自分の目標を成し遂げるためには、自分の専門分野を持つだけでなく、公共部門と民間部門両方での経験が必要不可欠であると判断しました。今までは公益の観点から都市政策を研究してきたのですが、来年からは民間の不動産会社に入社し、自分の専門性を高めていきます。まずは不動産業界でプロフェッショナルになり、この分野で日本を含むアジア先進国と途上国との連携を強めることに貢献していきたいと思っています。

今まで自分に与えられた特別な機会、そして成願寺様を含め、自分を支えてくださった方々に対する感謝の気持ちを忘れず、アジア地域全体が共に発展していくことに貢献したいと思います。

合掌

▼学術研究振興基金「小笹会」へのお問い合わせ

【小笹会趣旨】小笹会は佛教ならびにアジア、アフリカ地誌を中心とする学術研究振興助成と、勉学の志に燃える学徒の生活相談という二大目的を持つ。その対象も佛教徒を中心に、広く内外に門戸を開放する。応募要項、願書をご希望の方は寺務所（FAX 〇三・三三七二・二七七四）まで。

【申込受付】 随時 【審査発表】 約五十日後

公募 成願寺縁起を毛筆で書いて長く後世に残しましょう

成願寺開基・鈴木九郎の墓地脇に当山の縁起物語を絵と文で紹介する看板を新たに設置いたします。つきましては、縁起物語の文章を数行ずつ分担して毛筆で書いてくださる方を公募いたします。

お書きいただいたものは後ほどつなぎ合わせて看板に仕上げます。境内に長く残るものです。皆さまには縁起を書くことを通じて法縁を結び、善根功德

を積んでいただけますようご案内申し上げます。

お申し込みはハガキにて受け付けます。「成願寺縁起看板係り」宛てに「お名前・ご住所・電話番号」をお書き添えのうえ、一月中にご投函ください。後日担当していただく箇所の見本と要項をお送りします。参加者のご芳名は永くお寺に保存いたします。

(作画・前田康成)

